



## 演奏生活60周年



IZUMI TATENO  
BIRTHDAY CONCERT 2020  
60TH ANNIVERSARY OF DEBUT



館野 泉  
ピアノ・リサイタル



悦楽の園



全国公演日程



2020

10月24日(土) 13:30 福岡 FFGホール

主催:館野泉ファンクラブ九州／エムアンドエム

10月26日(月) 19:00 北海道 札幌コンサートホールKitara 小ホール

主催:オフィス・ワン

11月1日(日) 14:00 神奈川 藤沢リラホール

主催:藤沢リラホール自主企画実行委員会

11月7日(土) 15:30 福島 南相馬市民文化会館(ゆめはっと)

主催:公益財団法人南相馬市文化振興事業団

11月10日(火) 19:00 東京 東京オペラシティコンサートホール

主催:ジャパン・アーツ

2021

2月23日(火・祝)14:00 大阪 ザ・フェニックスホール

主催:キョードー

後援:フィンランド大使館 協力:館野泉ファンクラブ



## ESSAY & PROFILE

### 演奏生活60周年に思う

我家の庭に山茶花と海棠の二本の樹が並んでいる。山茶花はあなたが生まれた時に植えたと母が云っていた。

そうだとすれば84歳の老木。でも毎年10月から翌年1月ぐらいまで白とピンクの綺麗な花をまだ咲かせる。

妻のマリアは冬に花を咲かせるなんて奇跡みたいだという。北欧では10月から翌年5月までは雪と氷の世界。

自然に咲く花なんて考えられないからだ。

海棠は桜と同じ季節に咲く。樹全体を覆い隠すようにピンクの花が満開になると我が家にも春が訪れる。

35年前に世を去った父は海棠が大好きで、毎年下手な写真を撮っていた。

先日、藝大の奏楽堂で60年前に演奏したショーソン作曲＜ヴァイオリン、ピアノと弦楽四重奏のためのコンセール＞のテープ(巻き)が出てきた。もう10数年前に故人となった親友の玉置勝彦(ヴァイオラ)が自分の器械を持ち込んで録音してくれたのである。演奏しているのは私と浦川宜也、それに瀬戸瑠子、白神定典と私の妹晶子、弟英司。私が藝大3年、晶子が藝大2年、そのほかのメンバーは藝大附属高校3年であった。演奏会当日、古い奏楽堂は満席で床も抜けんばかり。安川加寿子先生も聴きにきてくださいった。

ショーソンは私の恋。あれを弾けたらもう心中してもいいぐらいと思っていた。音楽に恋をし、たくさんの曲を弾いて無我夢中で疾風のように駆け抜けた奏楽堂時代を思うと未だに胸が熱くなる。

60年前のショーソンはCDに刻みなおされ、いま復活する。

あれから60年。年を重ねる喜び、悲しみ、辛さ、死と隣り合わせを感じる孤独、しかしそこにある潔さ、面白さ、暖かくて悲しくて素晴らしい今。生きてきた年月は年輪となってすべて自分の中に刻まれている。樹も花も父も母も友も、そして音楽もともに。演奏することはいま生きている印。

苦海浄土を抜け、夢の王国を過ぎ、悦楽の園に至る。そしてその後は…

館野 泉



館野 泉(ピアノ)

IZUMI TATENO (PIANO)

クラシック界のレジェンド。東京生まれ。1960年東京藝術大学を首席卒業。1964年よりヘルシンキ在住。1981年以降、フィンランド政府の終身芸術家給与を受けて演奏生活に専念。領域に捉われず、分野にこだわらず、常に新鮮な視点で演奏芸術の可能性を広げ、不動の地位を築いた。北米、南米、オーストラリア、ロシア、ドイツ、フランス、北欧諸国を含むヨーロッパ全域、中国、韓国、フィリピン、インドネシアなどアジア全域そして中東の、世界各地において3500回をこえる演奏会を行う。人間味に溢れ、豊かな叙情をたたえる演奏は、世界中の幅広い層の聴衆から熱い支持を得る。これまでにリリースされたLP/CDは130枚以上。ピュアで透明な旋律を紡ぎだす、この孤高の鍵盤詩人は、2002年に脳溢血で倒れ右半身不随となるも、しなやかにその運命を受けとめ、「左手のピアニスト」として活動を再開。尽きることのない情熱を一層音楽の探求に傾け、独自のジャンルを切り開いた。“館野泉の左手”的に捧げられた作品は、10ヶ国の作曲家により100曲をこえる。命の水脈を辿るように取り組んだ作品は、拓いたジャンルをも飛び越え、ただそこにある音楽だけが聴くもののに心に忘がたい刻印を残す。11月10日の誕生日で84歳をむかえる。

<https://izumi-tateno.com>



## J.S.バッハ(ブラームス編曲):シャコンヌ ニ短調 BWV1004 より

J.S.Bach/J.Brahms: Chaconne for left hand

A.スクリャービン:「左手のための2つの小品」Op.9 より  
“前奏曲”“夜想曲”

A.Scriabin: 2 Pieces for left hand "Prelude" "Nocturne"

## 光永浩一郎:左手ピアノ独奏のためのソナタ

## “苦海浄土によせる” 世界初演 ♪ world premiere

Koichiro Mitsunaga: Sonata for left hand piano "Kugai-Jodo" or "Paradise in the Sea of Sorrow"

第1楽章:海の嘆き The grieving sea

第2楽章:フーガ Fuga

第3楽章:海と沈黙 Silence and the sea



## 新実徳英:《夢の王国》左手ピアノのための4つのプレリュード

Tokuhide Niimi: A Dream Kingdom - 4 preludes for left hand piano 委嘱作・世界初演 ♪ world premiere

I 夢の砂丘 Dune in a dream

II 夢のうた Songs in a dream

III 夢階段 Dream Stairs

IV 夢は夢見る A dream dreams

## パブロ・エスカンデ:「悦楽の園」 「館野泉左手の文庫」助成作品 委嘱作・世界初演 ♪ world premiere

ヒエロニムス・ボスのトリプティック(三連祭壇画)による自由な幻想曲

Pablo Escande: The Garden of Earthly Delights a free Fantasy uppon a Triptych of J. Bosch

導入部:天地創造の第三日目(閉じられたトリプティック) Introduction: Triptych closed

パネル1:乐园でのアダムとイヴ Panel 1: Adam and Eve at Paradise

パネル2:悦楽の园 Panel 2: The Garden of Earthly Delights

パネル3:地獄 Panel 3: Hell

♪ 館野泉に捧げる

\*11月10日(火)19時 東京オペラシティコンサートホールの公演は、  
テレビマンユニオンMember's TVU Channelでライブ配信をいたします。

演奏生活60周年、おめでとうございます。

一口に60年と言っても、それは決して平坦な道のりではなかったと思います。

とりわけ左手だけで演奏活動を再開しようと決意された背景には、並々でないご覚悟があったものと察せられます。

かれこれ30年前に偶然購入した一枚のCDが館野先生を識るきっかけとなりましたが、以来主にCDを通して、その繊細で表情豊かなピアノ演奏に親しんできました。

優しく穏やかで飾らないお人柄がそのまま音楽に反映し、その指先から紡がれる音楽には豊かな人間性、ヒューマンな暖かさが感じられると思うのは恐らく私だけでは無いと思いますが、最近では先生の演奏が表面的な美しさとは裏腹に、その表現の底に「生」への根源的な欲求、衝動のようなものを宿し、それが生き生きと躍動している、それこそが万人を魅了する最大の理由なのではないか、と思えてなりません。

健康に留意されつつ、今後とも益々若々しさと円熟味溢れる充実した演奏活動を展開されることを願って止みません。

岡田龍之介 チェンバロ奏者・日本チェンバロ協会会長



演奏生活60周年、誠におめでとうございます。このような時勢の中、記念すべき演奏会が多くの祝福とともに催されますことを心よりお慶び申し上げます。

本日の演奏会には光永浩一郎、新実徳英、パブロ・エスカンデによる世界初演作品が連なっています。

演奏家にとって「遺産の継承」とともに「未来の創造」こそ使命、との考え方ではデビュー当時から搖らぐことなく貫かれています。また、再演を何度も重ねることで、理想とする音楽像を追い求める姿勢は今も全く変わることがありません。

時代や地域、ジャンルを等価的に扱う態度とともに、偉大なる音楽家の矜持をここに見る思いです。

ますますお元気にて固有の表現世界を一途に追い求めていかれますようお祈り致します。

久保 祯 作曲家



館野さんの中には、動と静が渦巻いています。その渦はいつでも静かに大きくなっている。「動の渦」は不屈の魂、そして「静の渦」は無限の優しさ、そして希望。

館野さんが左手のピアニストになられた直後にお話しさせていただいたことがありました。その言葉が今も忘れられません。「左手しか使えなくなても、僕はまったく残念に思わないの。だって旋律の中にはいつでも和声があるから…両手で弾く以上に感じことだってできる…」柔らかな声で、そうおっしゃいました。どんな運命をも受け入れて、そこからご自分の世界を楽しげに築かれる。不屈の魂で苦しみも喜びに変えてしまうのが、館野さんです。

館野さんの音楽は“人間力”から生み出されていると感じます。だから私たちの心にダイレクトに響いてくる。

これからも、いつまでも、館野さんの素敵な音楽に触れていたいです。

84歳のお誕生日、そして演奏生活60周年 本当におめでとうございます。

小山実稚恵 ピアニスト





## PROGRAM NOTES

尊敬する館野泉さんが演奏生活60周年を迎えられます。心よりお祝いを申し上げます。

2016年には、80歳傘寿記念演奏会を中心に重ねて共演させていただきました。ラヴェルとともに、当時発見されたばかりのヒンデミットの大作、ルネ・シュタールと池辺晋一郎の委嘱作というプログラムは、ご自身に対する常に積極的な姿勢を示されるものでした。初日の練習で、すぐに私たちを包み込むような大きなお人柄に強く感銘を受けましたが、音楽に対する滾るような情熱と、緊張に溢れた素晴らしい演奏をご一緒できたことは本当にうれしく、今も忘れることができません。

今回も委嘱作品を含む大胆なプログラムが再び用意されています。素晴らしい演奏を確信するとともに、館野さんのますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

高関 健 指揮者



館野泉様、84歳のお誕生日おめでとうございます。

まだ先行きのはっきり見えないコロナ禍の中で、リサイタルを再開して頂ける事は本当に多くの方に希望と勇気を与えて下さることだとおもいます。

何回かコンサートを御一緒させて頂き、その度に館野さんのファンタジーに溢れる発想とその裏に、永年の体験に裏付けられた確固たる信念を身近に感じることが出来て、とても幸せでした。

世の中の細かいことにこだわらず、ご自分のペースで音楽に取り組んでおられる姿勢にはいつも敬服しております。音楽に対する限りない情熱と謙虚さと自分を律する強さ。

半世紀以上前にフランス・パリでお会いして以来、故浜中浩一と藝大時代からの親しい友人でもあったことから、長くお付き合い下さり、感謝しています。

いつまでも、90歳までお元気で、円熟した若々しさのある音楽を聴かせてくださいます様に。

二宮和子 クラリネット奏者



館野泉先生 デビュー60周年おめでとうございます。

私は小さい頃から、先生のCDが大好きで、特に『グリーグの抒情小曲集』はすり切れてしまうほどでした。また、コンサートも何回も聴きに行っていましたので、初めて直接お会いできたときは本当に嬉しくて、リハーサルから本番の演奏まで、先生の姿を食い入るように見て、一つの音も聞き逃さない、と思っていました。

自然体で音楽に向き合う姿、美しい音へのこだわり、ペダルの使い方、勉強になることばかりです。いつも新しいことに挑戦されて、今なお世界中で演奏活動を続けていらっしゃる館野先生に尊敬の気持ちでいっぱいです。

これからも真の音楽家としての生き方を見せていただけることに感謝し、私もその背中を追っていきたいと思います。

藤田真央 ピアニスト



### ■J.S.バッハ(ブラームス編曲):シャコンヌ ニ短調 BWV1004より

J.S.バッハは、ヴァイオリン演奏の限界に挑むかのような『無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ』(全6曲)を作曲したが、中でもパルティータ第2番の最後におかれた長大なシャコンヌは、深い精神性と豊かな幻想性をそなえ、バッハの芸術の最高峰に位置する作品のひとつである。この類稀な傑作は、後世の数多くの作曲家を魅了し、ブゾーニやストコフスキ、シューマンなどによって様々な編曲が生み出された。本日演奏されるブラームス編曲の左手のためのシャコンヌは、バッハの原曲に非常に忠実な編曲となっており、左手のピアノからひろがる音楽の世界には、これ以上削ぎ落とせない音楽のエッセンスが詰まっている。そこからは、ブラームスがいかにバッハの音楽を崇敬していたかが伺えるのである。ヴァイオリンと違い、一旦打鍵すると音が減衰するピアノで単音が続くフレーズを表現するのは易しくないが、「弾いていると精神が研ぎ澄まされて、身体がそれに動かされていくのを感じる」と館野氏は述べている。

### ■A.スクリヤーピン:「左手のための2つの小品」Op.9より“前奏曲”“夜想曲”

ラフマニノフと共にロシアを代表するピアニスト・作曲家。早くから卓越したピアノ演奏の才能を見せモスクワ音楽院に入学したが、在学中に練習のし過ぎで右手を痛めて演奏できなくなった時期があり、その間に書かれたのがこの作品(1894年作)である。後年にスクリヤーピンが見せる神秘的・前衛的な作風とは異なり、若き日のこの作品はショパンの影響を受け、ロマンティックな情趣があふれている。左手の高度な技術が要求されることから、両手で演奏されることも多いが、弾いている手が一本であるか二本であるか忘れてしまうほどの大きな音楽の力を感じさせる曲である。ラヴェルの『左手のためのピアノ協奏曲』と並んで、左手のために書かれた代表的なピアノ曲として名高い。

### ■光永浩一郎:左手ピアノ独奏のためのソナタ“苦海浄土による”(2018)

第1楽章:海の嘆き

第2楽章:フーガ

第3楽章:海と沈黙

左手ピアノ独奏のためのソナタは、ピアニスト館野泉氏のために2018年に作曲され同氏に献呈された。ソナタ形式による第1楽章「海の嘆き」、第2楽章「フーガ」、第3楽章「海と沈黙」からなる。

2018年に一冊の本に出会う。それは石牟礼道子著「苦海浄土」。熊本に住みながらこれまで強く意識したことはなかったが、水俣病告発文学とされるこの本はたいへん著名であり大きな影響を与えてきたといわれている。水俣病問題は大変重いテーマであるが、ふとしたきっかけで強い関心を抱くようになった。それはあるナレーターの方から聞いた「のさり」という言葉だった。「のさり」とは「自分が求めなくても天の恵みを授かった」という水俣の漁師言葉であるという。彼女は水俣で石牟礼作品を朗読する機会を持ち、患者や遺族が抱く思いに強く心を打たれたのだという。それは患者たちが水俣病の苦しみも天から授かった「のさり」として受け入れ前向きに生きたいと願っていること。

「のさり」によって前向きに生きること。それは慈愛の心によって全ての悲しみや苦しみを喜びに換えられることではないか? ふとそう思った。そして2018年11月に数回水俣を訪れ、多くの患者を出した入江の集落や、水銀廃液が沈む旧百間港を浚渫(じゅんせつ)し埋め立てた水俣広域公園等を見学する。未だ浄化には程遠い現実を目の当たりにして「苦海浄土」をテーマに作曲しなければと誓う。

著者・石牟礼道子が言葉を失った患者たちに寄り添い一体化し憑依するように語ったというのが「苦海浄土」だという。

「あのタコ奴はほんにもぞかとばい。壺ば揚ぐるでしょうが。足ばちゃんと壺の底に踏ん張ばって上目使ひて、いつまでも出て来ん。こら、あまや舟にあがったら出ておるもんじゃ、早う出てけえ。出てこんかい、ちゅうてもなかなか出て来ん。出たが最後、その逃げ足の早さ早さ…」

「春から夏になれば海の中にもいろいろの花の咲く。藤壺じやの、いそぎんちやくじやの、海松(みる)じやの、水のそろそろと流れゆく先ぎわに、いっぱい花をつけて、ゆれるるよ。」

これら水俣病のユーモラスな抑揚に、海上での漁の雰囲気や日差しの暖かな自然の恵みをあたかも手に取る如くに感じられるのである。

12月9日に脱稿。第1楽章に「海の嘆き」と副題を与え全曲を完成した。

晩年の石牟礼道子氏がインタビューで発した言葉が今も心に大きくなき刺さっている。

「最低の希望はわかりあう努力をすること。わかりあえないということが一番せつない」。

(光永浩一郎)



## PROGRAM NOTES

### ■新実徳英:《夢の王国》左手ピアノのための4つのプレリュード

館野泉さんとはふとした御縁がもとで、メリカントのメロディの2台ピアノ版の編曲をさせていただいたことがあった。張り切りすぎて、編曲の域を飛び超えたようで、その意味ではご期待を裏切ったかもしれないが、僕としては存分に仕事を楽しんだのだった。

さて、館野さんが「左手のピアニスト」になられた事態を知った時、左手のための曲をプレゼントしたく思ったが、当時の僕には方法論が見つからず、あきらめていた、が、数年前「あ、こうしたら書けるな!」と気がつき、左手のための曲を書くことにした。M.K.氏が仲介の労をお取り下さり、2020年11月の初演を念頭に作曲を開始した。

音楽作品に「夢」というタイトルを付したのは、たぶんR.シューマンが最初の作曲家だろう。以来、夢はZ.フロイトの分析対象となったり、文学の主題となったりしてきた。この作品では、自分が体験した夢を想像した夢がないままで楽想に顯れてくる。

夢はなんとも不条理・不合理で訳がわからない。が、夢の側から見たら、夢こそが現実で、私たちが現実と信じているのが夢の世界かもしれない。そんな想像を楽しみながら〈夢の王国〉が誕生した。

以下、各曲について簡略に記す。

#### I 夢の砂丘

砂丘の砂がジリジリと移動し、形を変えていく。歩こうとしても足がズブズブと埋もれていく。そんなイメージ。

ペダルやソステナート・ペダルによる余韻の美しさが表現のポイントになっている。

#### II 夢のうた

夢で聴いた音楽は実に精妙で、香しくはあるが、目が覚めると同時に消えていく。

この曲では一つの夢のうたの中に、別のうたがいくつも「侵入」してきて、錯綜した世界が生まれる。

#### III 夢階段

うた寝をしているときに「足を踏みはずすことがありますね。あれは一体なんだろう。この曲では「階段を踏みはずす」、あるいは「階段が途中でなくなっている」、そんなモチーフで始まる。とめどなく続く螺旋階段のイメージもあるようだ。

#### IV 夢は夢見る

「夢の中の夢」を想像してみた。全体は静かにうつろっていく。儂さと確かさが同居しているような不思議な空間。そして夢の王国はかなたへと消えていく。

今回の貴重な機会(出版を含めて)をいただいたことを、関係各位の皆様に心より謝意を表したく思います。

(新実徳英)

### ■パブロ・エスカンデ:「悦楽の園」

ヒエロニムス・ボスのトリプティック(三連祭壇画)による自由な幻想曲

ヒエロニムス・ボスがこの絵画で何を伝えたかったのかは誰にも知る由はないが、いくつかの興味深い解釈が存在する(その内のいくつかは奇妙なもの)。ボスはこの作品に題名を付けず、署名もしていない…。描くのに10年から15年もの年月を費やした傑作の作者を、なぜか匿名のままにしておきたかったようである。

唯一のほぼ確かな事は、これは通常のトリプティックのように教会のために描かれた作品ではなく、オランダ王室の私的な使用のために委嘱されたものであったという事だ。この作品の4つのパネルは(三連祭壇画の扉が閉じられた状態も数に入れた場合)、膨大な情報量で細部まで非常に緻密に描かれている。ここでは私がこの「幻想曲」を作曲するにあたり、この絵から靈感を得た要素について類推するに留めようと思う。

#### 導入部:天地創造の第三日目(閉じられたトリプティック)

ボスは、扉が閉じられた状態のパネルには色彩を無くすように注意を払い、モノトーン(全てグレー・スケール)で描いた。両扉を開くと、中面のパネルの強い色彩感との対比に衝撃を受ける。

閉じた左扉の上方遠くには神の姿があり、「天地創造」の第三日の様子を表している。まだ太陽も月も如何なる種類の動物も創造されておらず、水と岩と草木だけが色彩の無い惑星の上にある。

音楽は、高音からゆっくりと始まり(色彩のヴァリエーションはほとんどない)、後にパネルで示される事柄への準備として「幻想曲の主題」であるグレゴリオ聖歌の主題が提示されるが、これは全ての樂章に登場する「キリエ:オルビス・ファクトール(創造神)」である。この導入部の最後には、閉じられた2枚のパネル(左側と右側)の扉が聞く音として、双方向より柔らかなグリッサンドが聴こえてくる。

#### パネル1:楽園でのアダムとイヴ

内側の最初のパネルは垂直に2つに分割され、上方に“生命の泉”と、その下にイエスが描かれている。天地創造の第三日には(トリプティックが閉じた状態)神は老人の姿をしているが、第六日にはイエス・キリストとなり、イヴにアダムを紹介する姿に描かれているのが興味深い。

右側 一女性の側にイヴと彼女に関係する要素。

左側 一男性の側にアダムと彼に関係する要素。

ここに描かれた地上の楽園では、全てが本来あるべき良い状態ではない。

本物の動物と空想上の動物があり、お互いを追いかけ合い、食いあうものもいて、必ずしもエデンの園の“生命の泉”(絵の中央にあり、我々の方に向いている)にいる必要のない、中世では“悪魔”を意味したフクロウなどが見える。すでにイヴの側には小さな怪物たちが暗い洞窟の方へ向かって這う姿や誘惑の蛇(サタン)が見え、岩の上には、はっきりと“顔”が描かれている。

音楽は、ここで完全にキリエ:「オルビス・ファクトール」のメロディ(神・イエス)が、二通り(アダムとイヴのため)奏される。

#### パネル2:悦楽の園

パネル1とパネル2は、似たような色彩と高い水平線を共有している(これによりボスは多数の要素を上から下へ4層に分けて緊張感を高めながら描くことが出来ている)。

これは、アダムとイヴの後の地球の姿で、異なる人種が住んでいる。子どもも、老人もいない。全員が動いており…基本的に良い雰囲気で人々はあらゆる種類の出会いを通して地球上での生活を楽しんでいる。

しかし、矛盾も存在する。

魚が飛び、鳥は泳ぎ、そのうちのいくつかは誇張され不均衡な大きさで、人間と交流している(我々人間と同じ階層なのか?)…また、あらゆる大きさの果物が人間と関わりを持つように描かれている。

最上部には、4つの建物があり(それぞれが楽園の4つの川を象徴する)、中央には“生命の泉”的に見えるものがあるが、一部が割れて裂けそうになっている。

ここでの音楽は、全てギリシャ旋法によるもの。テンポは速く一定で(無窮動)、爽やかで心地よい曲想であるが、終わりに近づくにつれ緊張感が高まり最後のパネルへと向かう。

#### パネル3:地獄

この最後のパネルは他と全く異なる。水平線は不在で意図的なカオスと影が描かれる。垂直線ではなく、対角線がある。この絵は「音樂地獄」と呼ばれてきた…。楽器がたくさん描かれているのだ。

上方にある火の地獄では夜の街に炎が放たれ、下の氷の地獄では黒い凍った川の上で火が燃えている。中央にはサタンと思われる“木の人間”がこちらを見ており、多数の怪獣と悪魔が地獄に落ちた人々を拷問している。あらゆる罪と悪行と永遠の罰(それは当時、確かに畏られたものだった…)が示されている。上方の暗い色彩と下の方の明るさが他の2枚のパネルとの対比を創り出している。

3つのパネルに共通するのはイヴの存在(パネル1:明確に視認可能、パネル2:右下の洞窟の中で手にリンゴを持った姿、パネル3:イヴは中央から右寄りの下方の、人間を食べている鳥人間の怪獣の下で、悪魔の木に抱かれるようにして座っている)。

グロテスクなキャラクターは、「オルビス・ファクトール」の音楽で提示され、予期せぬ長さの休符(沈黙)、打楽器による効果音、反復する音符、クラスター(密集和音)、十二音技法の音列などが、作品に分散して配置されている。

ここで特筆しておきたいのは、私がこの曲にボス自身が作曲した音楽を仕込んだ事だ!…注意深く、楽器がたくさん描かれたあたり(左側にあるリュートの下に人間の体が敷かれている)を見ると、本と人間の尻があり、尻に音符が書かれているのが分かる。その曲こそ“p”的部分で聴こえる音楽であり、無伴奏で22小節と、90小節目に登場する。これは少し前に学生グループが絵の中の人間の尻に書かれた音符の暗号を解読したもので、私にはとても面白く思え、この作品に取り入れたいと考えた。

作曲をしていると度々、自分が“絶対音楽”や“標題音楽”的な作曲を企てる事により、作成するかもしれない音楽の種類の多様性に驚くことがある。我々作曲家は、巨匠たちの古典の傑作(絵画、彫刻、詩、物語)の中に音楽との関連性を見出し、刺激される。そのように過去を振り返る事で我々は新しい視点で異なる要素を組み合わせるが(新旧のフュージョンを創造して)、人は同じ刺激からそれぞれが違う反応を示すため、組み合わせ方は無限となる。

今回のように、標題となる要素から音楽を創り上げた事は作曲家として大変な喜びであり(もしそれが成功していれば)、聴衆にも喜びをもたらしてくれるのではないかと思う。

(パブロ・エスカンデ)